

岸田 紀著

『ジョン・ウエズリ研究』

西村 貞枝

本書は、二〇余年の長きにわたって、一八世紀イギリスのメソジスト運動の指導者ジョン・ウエズリの研究に専念してこられた岸田紀先生が、これまで『名古屋大学論集』などに発表された成果を一本にまとめられた注目に値する労作である。本書には、二つの大きな目的があると思われる。すなわちメソジズムと呼ばれるウエズリの神学を正しい系譜に位置づけることと、それによって、マックス・ウェーバーの理念型への一つの反証を呈示することである。

本書を一貫する論点の中心は、ウェーバーの有名な『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（著者にならって、以下『倫理』と略す）の一九二〇年版において引用されたウエズリの文章に対するウェーバーの解釈及びそれと不可分のウェーバーの原文引用方法についての著者の疑問である。その論証の基礎をなすのは、ウェーバーが『倫理』で提起した「伝統主義的」倫理から「職業」倫理への「倫理の転換」は、キリスト教倫理の核心をなす「よきわざ」の内容的転換なしには成立しえなかったのではないかという観点である。さらに押し広げれば、ウェーバーは、カトリックの伝統主義的倫理とカルヴィニストの職業倫理とにおける「よきわざ」の相違を、その組織的・方法的性格の有無

に求め、その際に無前提で職業労働すなわち「よきわざ」としてゐるが、伝統主義的倫理においては、最後の審判日の「永遠の救い」と結合すべき「よきわざ」には世俗的職業労働が含まれていないのではないか、したがってウェーバーの「職業」倫理の理念型におけるように、カルヴィニストが自己の「救いの証明」を合理的職業労働に求めたとするならば、その「救い」と「職業」労働との結合は、伝統主義的な「よきわざ」の内容的革新なくしては成立しえなかったのではないか、という観点である。

この観点から著者は、カトリックの「伝統主義的」倫理の系譜に立つイギリス国教会高教会派の「慈善」倫理における「よきわざ」とカルヴィニストの「職業」倫理における「よきわざ」との内容的相違、およびその相違と表裏をなす両倫理の「召命」思想の相違という面から、ウェーバーのウエズリ解釈に対して疑問を提出した。つまり、神の「普遍的恩恵」説に立つアルミニアンのウエズリは、世俗的職業労働における「特殊的召命」思想を欠き「よきわざ」に職業労働を含めない点で、高教会アルミニアンの「慈善」倫理の系譜に立つことを指摘することによって、アルミニアンのウエズリを「特殊的恩恵」説に立つカルヴィニストの「職業」倫理の系譜に組み入れようとしたウェーバーのウエズリ解釈に対して反証を提出し、ウェーバーのウエズリに関する理念型の論理的不整合性を、極めて明解に主張したのである。

筆者は、最近つねになく惹きこまれるような牽引力で本書を読了し、書評の一文を草することになったものの、専門を異にする若輩ゆえ「書評」などとはおこがましいが、以下簡単に本書の内容を紹介しながら、若干の所感を述べたいと思う。本書は三つの

編から成り、各編が二章ずつで構成されている。

第一編「問題の提起」の冒頭で、著者は、ウェーバーが『倫理』で提起した「禁欲的プロテスタンティズム」の「職業」倫理と「資本主義の精神」との親和性という命題は、いわゆる「資本主義精神起源論争」という形で活発な研究・論争の対象とされてきたが、事実の点からのウェーバー説の再検討、つまり彼の理論が果して「健全な歴史的分析」の上に立てられているかどうかという点の究明が看過されてきたとして、著者のウェーバー批判の立場を明らかにしている。

ウェーバーは、ウエズリの一文章を『倫理』の最終節の結論部分に引用し、同文章を「禁欲的プロテスタンティズム」の「職業」倫理と「資本主義の精神」との間の適合的連関を論証しようとした彼の『倫理』の「標語とするにふさわしい」文章であるとした。著者は次の編でウェーバーのウエズリ解釈を覆えす前に、ウェーバーがウエズリの原文に「概念的加工」を加えたとして、まず第一章「ウェーバーの引用典拠への疑問」において、ウエズリの同文章引用にさいしてのウェーバーの典拠の不確実さを明らかにしている。つまりウェーバーはウエズリ及びメソジズムに関する根本史料を繙かずに、いくつかの難点を含むサウジの『ウエズリ伝』(一八二〇)からウエズリの問題を孫引きした、しかもウェーバーはそのサウジの『ウエズリ伝』すらも直接は読まず、サウジの引用文をイギリスの経済史家アシュリーのウェーバー宛書簡(一九一三)から再引用したという。そのアシュリーは『倫理』五年版のウェーバーの理論を全面的に支持するとともに、その理論

の妥当性を裏づける好個の史料として、ウエズリの問題の文章を提示してきたのをウェーバーはなら史料批判を行わずして二〇年版に引用したというのである。

ウェーバーの引用方法への疑問、これはそれだけで十分に驚くべき指摘であるが、著者はさらに第二章「ウェーバーのウエズリ解釈への疑問」で、ウェーバーが、ウエズリの文章引用に際して自己の理念型に適合しないウエズリの原文に改変の筆を加えたことを、ウエズリの原文、サウジの引用文、ウェーバーの引用文の比較対照表によって指摘する。そしてそのような原文への「概念的加工」の結果、ウエズリの本来の倫理像とは著しく異なった、営利の解放と消費の圧殺、その外面的結果としての資本形成というウェーバーの理念型に適合的なウエズリの倫理像が構築されたという。ところで、自己の「救いの確かさ」を「合理的職業労働」において証明するという「職業」観念の点で、カルヴィニストの倫理を「伝統主義的」倫理から峻別したのが、ウェーバーの『倫理』の構想の出発点である。それゆえ、その職業労働における「救いの証明」という決定的な点を欠くことをウェーバー自身認めているウエズリの倫理が、カルヴィニストの倫理とまったく同一の職業観念を発達させ、同一の影響をもたらしたとするならば、ウェーバーの構成した「職業」倫理の理念型は論理的自己矛盾におちいるではないかとの重大な疑問が提示される。

この点をさらに解明するために、次に、ウェーバーがウエズリからの(加工の施された)引用文に読みこもうとしたカルヴィニストのピューリタンの職業倫理と、ウエズリの原文に表明された、伝統主義的倫理の流れを汲むイギリス国教会の高教会アルミニア

ンの「慈善」倫理、この兩者における「よきわざ」の相違、及びその相違から由来する両倫理の構造的相違が、エリザベス朝のピエリタン、ウィリアム・パーキンズの『職業論』を中心に考察される。その結果、ウエズリは、高教会アルミニアンの系譜に立つものであり、したがって問題のウエズリの文章もこの高教会的禁欲倫理の表明であり、ウエーバーの引用文章は、ウエズリの倫理の根幹ともいうべき「慈善」を切り払い、残る枝葉である高教会アルミニアンの「勤労、節約」にカルヴェニストのピエリタンの「職業」倫理を接ぎ木したものであろうとの推論を述べている。

第二編「ウエズリの高教会主義の系譜」では、ウエズリ神学の骨子である『メソジズム論』を掲載した『アルミニアン・マガジン』発行の背景となったウエズリの高教会アルミニアニズムの系譜を考察し、さらにその高教会アルミニアニズムとウエズリとの接点となったサムエル・ウエズリ一家及びオックスフォード大学のトリー高教会主義とウエズリとの関係を考察している。

第一章「ウエズリの高教会主義の系譜」は、要するに、イギリスにおけるアルミニアンとカルヴェニストの闘争史である。国教会神学におけるアルミニアニズムの占める位置の変遷が、一六世紀末から名譽革命期まで辿られる。「国教会神学の主調がカルヴェニズムにあった」時期や神学的にカルヴェニストのジェイムズ一世がアルミニアンを擁護したという一見奇妙にひびく事実などが、神学面と教会政治面の両方から明解に説明されている。アルミニアニズムの神学がカンタベリの正統信仰として確立したのは、

「王権神授」と「絶対服従」の教義を強調しピエリタンに対して攻撃的なロードが大司教に就任し、王座と高教会アルミニアンの同盟が形成された時である。このロード派は当然のことながら内乱時に凋落し、王政復古後再び盛り返し教界及び政界に支配的勢力として立ち現われた。このロード派の勝利は、同時にカルヴェニズムに対する高教会アルミニアニズムの勝利を意味し、名譽革命勃発までの間に予定説に対するアルミニアニズムの勝利が決定的となった。が、ロード派はその教義ゆえに、名譽革命では再び苛酷な試練に出会うことになる。

第二章「ウエズリのトリー高教会主義の起源」では、まずウエズリの高教会主義の思想的背景というべき両親の影響が述べられる。その両親の姿は、名譽革命後、国教会主流派の地位から転落した、とくに聖職を剝奪されて野に下った臣従拒誓者の運命の代表的縮図でもある。ウエズリの両親が、同じトリー高教会人でありながら、一時新王への臣従拒誓の是非をめぐって不和・別居にいたるといふのも、宗教的立場と政治的忠誠とが緊密に結びついていたこの時代のイギリスならではの夫婦像であらう。このような家庭で生い育ったウエズリは、とりわけ峻格な拒誓派の母親スザンナノ思想を受けついでという。筆者は、そのように母親の影響を強く受けていたウエズリがジョージ三世の神授權を認めることになる経緯が、単に時代の流れという説明だけでは納得できないものを感じたのだが、彼ら臣従拒誓者には教区外礼拝の遵守など非国教的要素がみられたが、著者は、この名譽革命後の高教会主義の変容という現象に、生涯自らを忠実な高教会人だと公言し続けたウエズリが、メソジスト運動において保持した非国教

的要素の源を求めている。

次に、ウエズリがその精神形成期を過ぎたオックスフォード大学におけるトリー高教会主義とウエズリ兄弟らの「オックスフォード・メソジスト」の関係の程が吟味される。ウエバーにみるように従来の系譜論では、メソジズムは、たんに彼らの「方法的に営まれ、かつ審査される生活」という現象をもって、カルヴァニストのピュリタンの系譜に立つものと往々にしてみなされてきた。しかるに、オックスフォード・メソジストの規則的・方法的・自己審査的生活態度は、ロード派高教会人の影響下に形成されたものであり、従来の系譜論に無理のあることが結論される。

第三編「ウエズリの『慈善』倫理の系譜と構造」では、前編でみられたようにウエズリの倫理形成にさいして決定的影響を与えたと考えられる高教会派の「慈善」倫理とウエズリとの関係、さらにウエズリ自身の倫理構造が考察され、それによってウエズリの『メソジズム論』中の問題の一文章に表明された倫理を、ウエバーの「職業」倫理的解釈とは反対に、むしろその倫理とは対立的な高教会アルミニアンの「慈善」倫理の系譜の上に位置づけ、ウエバーに関する理念型の論理的矛盾を指摘している。

まず第一章「高教会派の『慈善』倫理とウエズリ」において、著者はウエズリにいたるまでの高教会派のうち、ウエズリの倫理形成にあたって決定的影響を与えたと考えられる人々——テラー、ネルソン、ヒックス、ロー——の著作から、高教会派の職業観念を含む社会倫理像を構築し、その倫理像とウエズリとの一致を論証していく。この部分は、本書中、最大の紙数を占める労作

であり、ウエズリとの関係を別にしてそれだけで、わが国に一つとない高教会派の考察として学界に貢献する重要論考であろう。本章の内容の豊かさは、筆者の手では十分に紹介しきれないので、全体の構成を節と項のタイトルでもって示しておくことにする。

第一節 テラーの「慈善」倫理

第二節 ネルソンの「慈善」倫理

一 ネルソンの生涯とウエズリ

二 ネルソンの「慈善」倫理

第三節 ヒックスの「慈善」倫理

一 ヒックスの生涯とウエズリ

二 ヒックスの「慈善」倫理

第四節 ローの「慈善」倫理

一 ローの生涯とウエズリ

二 バンガー論争におけるローの倫理構造

三 ローの「キリスト者の完全」の倫理構造

四 職業における「意図の純粋と聖潔」

五 「完全な愛」の金銭の使用法

テラーを始めとする高教会派の倫理は、渾然一体となつてウエズリの倫理形成に参与しているが、なかならずウエズリの同時代人ウィリアム・ローが、メソジスト運動の出発点で彼に与えた衝撃は、のちにローの神秘主義への没入で両者が不和に陥ったとはいえ、ウエズリの生涯を通じて、彼の倫理観にもっとも強力に作用していたという。そこで、ここでは紙面の制約上、ローの「慈善」倫理のみを簡単に紹介したい。ローにおける「キリスト者の

完全」とは、キリスト者が自己の「救い」に不可欠のキリスト教的義務をできる限り完全に誠実に履行することであり、その義務とは、全てを神に完全にささげる「意図の純粋と聖潔」さらに、その昇華された究極的形態というべき、神と全隣人に対する「完全な愛」の義務である。「キリスト者の完全」の倫理の、このような原理的構造から、ローは世俗的職業人の日常的社會行為の中心をなす「職業」における「意図の純粋と聖潔」の追求、さらにローにとってはその「職業」における中心的課題というべき「金銭の使用法」を通じての「完全な愛」の追求を、彼の「キリスト者の完全」の倫理の実践的構造の中心的位置にすえた。そこから「慈善」を最高形態とするローの「隣人愛」は、カルヴィニストのそれとは異質なものとならざるをえない。すなわち「職業」労働の遂行による「生産力的な」社会的貢献の中に表明されるところの、カルヴィニストの「隣人愛」は、構造的に「營利」と媒介しあうが、一方「非生産的な」慈善」において社会的に実践されるところの、ローの「隣人愛」は「營利」とは構造的に結びつきえない。結局、ローの「キリスト者の完全」の倫理は、その構造契機としてカルヴィニストと同一の禁欲的諸契機を含みながら、その構造及び機能を異にするものであり、その相違は、最後の審判日における「永遠の救い」の条件としての「よきわざ」の解釈の相違に由来するといふのである。

第二章「ウエズリの「慈善」倫理の構造とウエーバーの論理的矛盾」の前半部では、ウエズリ自身の倫理構造が、彼の著作の豊富な駆使によって説明されていく。彼の説く「キリスト者の完全」はなによりも「慈善」による富の自発的放棄を通じて追求される

べきもので、その思想はカルヴィニストの攻撃した中世的な有機体的「公正」の社會倫理であると、著者の中心的命題に帰結するのである。すなわち、ルネサンス人文主義的要素を含むアルミニズムの倫理体系に立つウエズリの「人間的」隣人愛と、神の絶対的主権のカルヴィニズムの倫理体系における「非人間的」隣人愛との対立であり、またウエズリの説く「慈善」という人間的な「よきわざ」と、カルヴィニストの主張する「職業」労働という非人間的な「よきわざ」との対立である。またウエズリの「完全」を追求する「方法」の点でも、昔ながらの宗教、アングリカンの宗教であったことが示される。さらに次に、ウエズリの「慈善」倫理の構造が、彼の生きた一八世紀という時代背景をふまえて考察される。

本章の後半部では、ウエズリの『メソジズム論』そのものの分析によって再度精緻なウエーバー批判が展開されている。ここでは、ウエズリの原文の真意と著者の結論部分を要約しておくにとどめる。

ウエーバーは加工を施したウエズリからの引用文に「勤勞、節約、資本蓄積」というピューリタンの資本主義的倫理構造をよみこんでいるが、ウエズリの原文は「勤勞、節約、施しによる慈善」という高教会派の「慈善」倫理構造を示している。また、ウエーバーはその引用文に「勤勞、節約」の結果としての富の増大が神の恩恵であり、自己の「救いの確かさ」の象徴であると確信するピューリタンの「職業」倫理をよみこんでいるが、ウエズリは、その富が「地獄の底へ沈める」ことを警告している。ウエズリにおいては、世俗的職業労働はいかなる行使の仕方であれ、「救い」

と結合すべき「よきわざ」の位置を獲得していない。彼にあっては、富の増大が「滅び」にいたらせない「ただ一つの方法」としては「施し」あるのみである。

したがって、ピューリタンの「職業」倫理体系に対立するものとしてウェーバー自身が構成した理念型の論理的諸特徴をもつ、アルミニアン高教会人ウエズリの文章を、カルヴィニストの「職業」倫理と「資本主義の精神」との適合的連関を主張する自己の理念型の「標語とするにふさわしい」文章とすることによって、また高教会人ウエズリが、ピューリタンとまったく同様に職業観念を發達させ、同一の「市民的な職業のエートス」を生みおとしたとみなすことによって、ウェーバーは自己の理念型の論理的整合性を自ら打ちくずしている。しかもこれはウェーバーの理念型の論理的矛盾性という問題にとどまらない。ウェーバーは、ウエズリの「慈善」倫理における職業観念の倫理的特徴をもっともよく表明した二ヶ所の語句を、自己の構成した理念型に適合的な語句に改変した上で、ウエズリの同文章を引用しそれによって自己の理念型の妥当性が「争いがたい」事実として証明されたことと主張しているからである。こうなると、歴史認識の手段である理念型がもはや自己目的化している。ウェーバー自身、理念型理論において、現実が「理論の召使」となる危険、理論が「現実に暴力を加えて」その理論的構成の現実における妥当性を証明しようとする誘惑を警告したが、この理念型理論の代表作の『「倫理」の改訂版の筆を執った時、ウェーバー自ら、まずこの落し穴におちこんだ、と力強い言葉で結語している。

さて、全三七〇頁になんんとする力作を、簡単に紹介することは容易ではなく、以上のような複雑な紹介によって本書の価値を傷つけ、敬愛する著者に對し非礼を重ねているだろうことを寛恕していただきたい。『ジョン・ウエズリ研究』という表題からすれば、ウェーバー批判は、著者の研究の道程における副産物とみなしてよいのかもしれないが、とまれ本書の構成にみる限りでは、各章各節がすぐれて論理的で、著者の中心的命題であるウェーバーの理念型理論への反証ということに帰結しており、著者の本書における最大力点はウェーバー批判にあると思われる。まさにその問題に真正面から取り組まれた執念の書というべきであろう。ところで、筆者の力量不足のゆえに、著者のウェーバー批判の当否の検討は然るべき専門家にゆずって、ここでは筆者の関心にしたがって、敢えて読後感の域を出ない妄評をつらねておくことにする。

ウエズリの倫理の系譜的遡源を目的とする本書の性格上、当然のことかもしれないが、ウエズリの生きた時代背景の中でのウエズリの人間像が、なぜか著者の描くウエズリの両親の極めてリアルな実像ほどには浮び上ってこない気がするのである。それは本書においては、一八世紀末のウィルクス事件その他の政治運動に對して彼のとった保守的態度などについては簡潔に描かれているものの、宗教的社會運動の組織者としての生きざまがあまり具体的に語られていないためかもしれない。初期ヘノーヴァー朝のイギリス社會において、形はさまざまであるが、非常に根深く、非常に横溢していた宗教精神の発露は、ジョン・ウエズリ及び彼の先導したメソジズムという一大運動が當時の社會大衆の中で果し

た役割の評価を抜きにしては語れないであろう。ウエズリの教えは、現実には国教会の牧師から無視されていた新興工業地帯の労働者階級の中でとりわけ著しく成長した。イギリス全土を席巻したその熱狂的運動は、宗教的組織者ウエズリと、民衆説教者カルヴァン派メソジストのジョージ・ホイットフィールドとの活動の総和ではなかっただろうか。著者は二人の対立を強調しているが、実際に働きかけられた下層大衆の側からみれば、ウエズリ神学の伝統主義的倫理とカルウイニズムとの相違は意味をもたなかったのではなからうか。たしかに、アングリカンを一色に片づけられないし、カルヴァン自身とカルウイニストとピューリタンも、「營利」の追求という点でひとまとめに図式化してしまうことは困難なように思える。するとまた同じことがウエズリ及びウエズリ主義者、メソジストたちの間にも云えるであろう。だが、そうなるのと、いくつかの範疇分けが、いくつかだけにとどまらず無限に分け続けていかねばならなくなるのではないかと、思想史における理論的作業の空中分解が懸念される。しかし、社会的影響という面からみれば、ウエーバー流の「營利」ということはともかくも、そこになんらかの共通項があるのではなからうか。

ウエズリと産業革命が史上時を同じくしたことは、たしかにその後教世代のイギリスに深い影響を及ぼしたであろう。今ここでカザミアンの『近代英国』をひもといて、ウエズリ評価を借用してみると、「ウエズリの倫理的・社会的影響は、近代英国を形成した一主因であった」とある。このくだりをウエズリ主義と産業主義の結びつきを指し示すとか、ウエズリの教えがイギリス中産階級のエートスとして機能したという風に解釈しないで、メソジ

ズムという熱狂的宗教運動が労働者階級の宗教・社会・教育の歴史に加えられたな一章という意味で捉えることはできるだろう。漠然と表現した「一章」という言葉に、具体的意味内容を与えることは、今の筆者には不可能であるが、ウエズリ神学の系譜を過去に辿っていくことと同時に、ウエズリと現実には彼から発した宗教的民衆運動との関係についての同程度に緻密な考察が、ウエズリ研究においては必要欠くべからざるものとなるだろう。とくに、産業革命直後からイギリスに拡がってくる博愛主義運動とウエズリの「慈善」倫理の神学とは接点をもつものであるうか。もたなかったとしたらなぜであろうか。最後に以上のコンテクストから離れるが、ウエズリがモラヴィア兄弟団の教説から受けた影響というのは、具体的にはウエズリ主義のどのような構成要素となつたであろうか。

思いつくままに一、二の疑問を呈してみた。といって、この筆者の一言が決して本書の真価を傷つけるものでないことはいくらでもなからう。御海容を乞う。

(A5判 三六六頁 一九七七年三月 ミネルヴァ書房 五五〇〇円)
 (京都大学文学部助手)